文献センター通信

第25号
2013年12月20日
一部100円

アナキズムカレンダー発売！
2014年版は「ギロチン社事件」

大変お待たせいたしましたが、恒例のアナキズムカレンダー2014年版を刊行いたしました。

2014年版のテーマは「ギロチン社事件」。1923年に大杉栄が虐殺され、その仇討ちとして、中濱鐵と古田大次郎らを中心として活動してきたギロチン社と、大杉が主宰していた労働運動社の和田久太郎と村木源次郎が合流、関東大震災時の戒厳司令官であった福田雅太郎大将を狙撃したのが1924年。それから90年となります。

登場人物たちは、中濱鐵、古田大次郎、和田久太郎、村木源次郎、仲喜一、倉地啓司、小西次郎、逸見直造・吉三、筬部治之助、山田正一、小西武夫、新谷與一郎。この12人を取り上げているものの、ギロチン社自体が極めて不定形な共同生活体のようなものから出発し、いくつもの名称を便宜的に使い分けていることから、誰がメンバーかということはあまり意味のないことかもしれませんが、濃淡こそあれ、一連の事件に関係したことにより彼らは歴史に名をとどめました。

2014年版カレンダーでは、彼らの事件を包括して「ギロチン社事件」として扱いました。その重層性をお楽しみいただければ幸いです。

【各月内容】
1月＝ギロチン社相関図＋各事件と被告人たち
2月＝中濱鐵
3月＝古田大次郎（一）
4月＝仲喜一・倉地啓司・小西次郎
5月＝逸見直造・吉三（特別寄稿：酒井隆史「大阪時代の和田久太郎」）
6月＝和田久太郎（一）
7月＝村木源次郎
8月＝ギロチン社事件
9月＝筬部治之助・山田正一・小西武夫
10月＝古田大次郎（二）
11月＝和田久太郎（二）
12月＝新谷與一郎

【仕様】A4サイズ、28ページ、頒価一二〇〇円（会員頒価一〇〇〇円）、送料1部80円

【取扱店舗】イレギュラー・リズム・アサイラム、模索舎（新宿）、古書りぶるりべろ（神保町）、三月書房（京都）ほか

【購入方法】①郵便振替（A文献センター口座・本紙奥付記載）に部数、氏名住所をご記入の上、送料込の値段をご送金②ウェブサイト販売ページで購入 http://cira-japana.net/

主な内容

2014年アナキズムカレンダー発売…1
報告・ガブリエル・クーン氏…2
河西蔵書が収納完了……4
2013年大杉栄ら刊行物リスト…5
和田久太郎のはえあるときⅢ……6

イベント報告

大杉栄・伊藤野枝没後90年集会開催

11月16日、東京新宿区の四谷区民ホールにて、「大杉栄・伊藤野枝没後90年集会」（主催：同実行委員会）が開催されました。

太田昌国さんが「アナキズムの予言」と題する講演を行い、大杉栄の先駆的な当時の社会主義批判などに触れて、権威主義的・中央集権的ではない運動の重要性などを指摘しました。

講演のあと、中濱鐵や古田大次郎ら大正ギロチン社の活動を描いた映画「シュトルム・ウント・ドランクッ」（監督・山田勇男、主演・中村榮美子、寺十吾）が初上映されました。

この日は同映画の初上映ということもあってか、多数が来場。途中、震度3の地震が発生して映画が中断するというハプニングもありましたが、それも含めて、90周年に相応しい集会となりました。

イベント報告

国際シンポジウム「グローバル・アナーキズムの過去・現在・未来～世界とアジアをつなぐために」

11月16日、明治大学にてガブリエル・クーン氏をゲストに招いた国際シンポジウム「グローバル・アナーキズムの過去・現在・未来～世界とアジアをつなぐために」が開催されました。

当日は、飛矢崎雅也氏「戦争と革命のあいだ〈生の拡充〉の射程」、栗原康氏「蜂起の思想－大杉栄の米騒動論」、田中ひかる氏「グローバル・アナーキズムから見た日本」、樋口拓朗氏「グローバル・アナーキズムと地球意志－東洋の共振からの示唆」、ガブリエル・クーン氏「グローバル・アナーキズムとアジア」の5氏による報告が行われました。

このうち、今号でガブリエル氏、次号で田中ひかる氏の報告要旨を掲載します。なお、当日の報告やガブリエル氏の滞在の模様などを収めた出版物も計画されているようです。

報告概要／ガブリエル・クーン

「グローバル・アナーキズムとアジア」

わたしの報告は以下の4つのコメントによって構成される。

1、現代のアナーキズムの現状について全般的なコメント

2、グローバルな運動としてのアナーキズムについてのコメント

3、現代のグローバル・アナーキズムに関わりアジアが果たす特別の役割についてのコメント

4、アナーキズムをグローバルに展開するための挑戦についてのコメント

以上4つのコメントそれぞれの中で、以下のように、いくつかの指摘を行う。

1、現代のアナーキズムの現状について全般的なコメント

(a) 90年代終わりから、グローバルなレベルで強力なアナーキズム運動が復活するという現象が見られる。

(b) 現代アナーキズム運動は、歴史上のアナーキズム「1945年以前」からわずかしか影響を受けていない。むしろ、現代のアナーキズム運動がインスピレーションを得ているのは、以下のようなものである。すなわち、60年代終わりに起きた反ブルジョワ抗議運動、過去数発売十年に起きた様々な社会運動（とりわけフェミニズム運動、クィア運動、エコロジー運動、動物の権利を擁護する運動が挙げられる）、ソ連崩壊後に起きた、反権威主義的で水平方向で結びつく組織を志向する強い感覚、サパティスタやブラジルの土地なき農業労働者の運動のようなポスト植民地主義時代の第三世界の運動などである。

(c) このようにして展開してきている現代アナーキズムにおいては、しばしば「階級闘争を志向するアナーキスト」と「新しいアナーキスト」もしくは、デイヴィッド・グレーバーの言葉を使えば「大文字のアナーキスト」と「小文字のアナーキスト」とのあいだで対立・紛争が起きてい

る。

(d)アナーキズム運動の復活は、活動家と研究者によるアナーキズムに関する活発な議論を生み出すばかりでなく、多様なプロジェクト（「フード・ノット・ボムズ」、「ノー・ワン・イズ・イリーガル」、インフォショップによる世界規模でのネットワークなど）、社会運動（反緊縮財政キャンペーン、オキュパイ運動など）に活力を与えている。これらのプロジェクトや運動のほとんどは、アナーキズムの原則から影響を受けている。しかしながら、アナーキズムの復活は、国家というシステムやグローバルな資本主義を本質的に弱体化するに至っていない。

わたしが考えている、現代アナーキズムを議論する上での枠組みとは、以上のようなものである。

2、グローバルな運動としてのアナーキズムについて

アナーキズムはよく「西欧」の運動であると批判される。なぜなら代表的な思想家（バクーニン、クロポトキン、モスト、マラテスタなど）はその理論をヨーロッパと北米における社会発展の文脈の中で展開したからである。このような認識と批判に対する回答としては、次のようないくつかの選択肢があり得る。

(a)そのような認識と批判は適切である。それゆえ、ヨーロッパ中心主義に反対する立場から、アナーキズムは拒絶されねばならない。

(b)そのような認識と批判は適切である。それゆえ、アナーキズム運動は意識的にその西欧的な特質を捨て去らねばならない。

(c)そのような認識と批判は適切である。ただしそれは、自らをアナーキストと規定する人々による運動についてのみあてはまる。しかしながら、西欧以外の世界においては、反権威主義的な諸運動の伝統が常に無数に存在してきた。今日のアナーキズムはこれら諸運動と一体となるべきである。

(d)そのような認識と批判は適切ではない。なぜなら、アナーキズムは、当初から西欧以外の世界に拡大したからであり、それらの地域は革命的な運動における重要な勢力となったからである（とりわけラテン・アメリカ、東アジア、そして北部と南部のアフリカにおいて）。

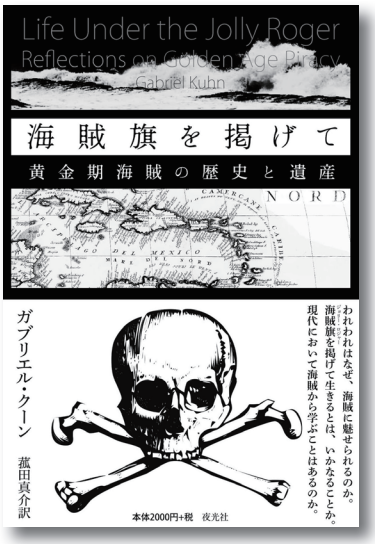
(e)そのような認識と批判は適切ではない。なぜなら、アナーキズムは当初から西欧以外の地域に拡大したからであり、しかも、それらの地域における社会発展によっても影響を受けたからである。

わたしは、以上のようないくつかの回答について意見を述べ議論をすることがきわめて重要であると考えている。なぜなら、私たちが今日のグローバル・アナーキズムに見出している可能性は、以上挙げた諸回答について私たちが抱く見解次第で大きく変わりうるからである。

3、現代のグローバル・アナーキズムに関わりアジアが果たす特別の役割についてのコメント

(a)過去数十年にわたり、20世紀初頭における中国、朝鮮、日本の革命運動にとってのアナーキズムがいまだ知られていないが重要であるということが［主に西欧言語の世界で］強く指摘され続けてきた。より多くの調査および「西」と「東」の研究者による共同研究によって、この歴史上の時期についての私たちの理解を鋭敏にする必要がある。

(b)近年、中国、朝鮮、日本を超えたアジア地域においてアナーキズムが高揚している。その中には、フィリピン、インドネシアにおける強力なアナーキズム運動が含まれている。アジアにおける現代のアナーキズム運動はしばしば「小文字のアナーキズム」と呼ばれてきたアナーキズムの特徴を強くもつ。［こういっ



ガブリエル・クーン新著
「海賊旗を掲げて」（夜光社）

た「小文字のアナーキズム」は過去のアナーキズムに関心を持っていない、と指摘されてきた」だが、それらの運動の担い手が、アナーキズムの歴史に対する強い関心も抱いているという点についても確認できる。

4、アナーキズムをグローバルに展開するための挑戦についてのコメント

(a)アナーキスト同士がグローバルにコミュニケーションを行っていく上では、言語、資金、そして新しいコミュニケーションテクノロジー、とりわけインターネットの利用というきわめて実務的な諸問題について取り組む必要がある。

(b)グローバルなレベルでのアナーキストによる連帯は、地域および領域レベルでの連帯が果たす役に関して議論すること、そして、それらをグローバルなものとするために議論することが不可欠である。

(c)わたしたちは、グローバルなレベルでの連帯に関するモデルについて議論する必要がある。インフォーマルなネットワークを超えて連帯する可能性はあるか。あるとすれば、どのような者が可能か。フォーマルあるいは組織による同盟を作り出すことはアナーキズムの原則を踏みにじることであろうか。

(d)わたしたちは、グローバルな反権威主義的な諸運動が構築するネットワークについて「アナーキスト」「アナーキズム」といったレッテルを貼ること＝そのように呼ぶことの重要性について議論する必要がある。そのような行為は、アナーキズム運動を強化するだろうか、あるいは弱めてしまうだろうか。

(e)とりわけ、もしわたしたちが「アナーキズム」という呼称を用いることが重要であると考えるとすれば、私たちは、この言葉をどのように使うのか、私たちはどのようなアナーキズムについて語り合っているのか、という点を明らかにする必要がある。

(f)国境を越えた有益なコミュニケーションの基盤を作り出すためには、帝国主義、植民地主義、そして人種差別の歴史を常に念頭に置き、アナーキスト同士でこの問題を議論する必要がある。

(g)帝国主義と植民地主義の歴史を念頭に置くのであれば、様々な領域におけるナショナリズムと国民国家の登場に関する問題も議論されねばならない。なぜなら地球上の様々な領域ごとに、議論の歴史的・政治的な文脈はきわめて異なるからである。

(h)運動内部における「たとえば南北問題のような」経済的な不公正に関する問題が提起されなければ、グローバルなアナーキズム運動が作り出されることはない。この問題を提起することは、困難であり、しばしば、痛みを伴うものであるだろう。

結論

グローバルなアナーキズム運動は、潜在的な可能性に満ちており、国家というシステムと資本主義に対するグローバルな抵抗運動を効果的にするために不可欠な運動である。たしかに、グローバルなアナーキズム運動を強力に展開する上では多くの障害がある（言語上の障害、資金の欠如、帝国主義と植民地主義の遺産、グローバルな社会的不公正など）。しかし、アナーキストの信念の中では、世界中のアナーキストがともに努力することでこういった障害は克服される、という確信が中心を占めている。障害を克服し、グローバルな運動を実現できるのかは、私たち自身にかかっているのであり、その際に、今回のような集会は重要な役割を果たすことになる。

（翻訳／田中ひかる）

河西蔵書の収納完了

09年12月に亡くなった河西善治氏の蔵書が全てセンターに納められました。この3年ほどの間、数回にわたって受領し、吉倉に収納された蔵書は12月に最後の分を運び終えました。

蔵書は現在、ダンボール箱から整理のため書架に移しかえられ、整理と目録作成の作業に入ります。実際に取りかかるのはしばらく先になるかと思いますが、少なくともようやく一覧できるようになったところです。以後の進捗状況は追って報告します。

大杉栄・伊藤野枝・橘宗一 没後90周年 2013年主要関連刊行物リスト

◎5月

「野枝さんをさがして／定本伊藤野枝全集（補遺・資料・解説）」
堀切利高編著／學藝書林

【目次】真の要求は女の自覚の後／西原和治と雑誌『地上』／英雄と婦人／著作中にあらわれた書簡／私の学校時代／書簡後藤新平宛）／2（大杉栄と堀保子の結婚を祝う葉書／自由恋愛の犠牲者／堀保子編輯『あざみ』／野枝さんの墓

◎6月

「大杉栄と仲間たち―『近代思想』創刊100年」
「大杉栄と仲間たち」編集委員会編／ぱる出版

詳細は本紙前号参照

◎9月

「新編 大杉栄追想」
山川均ほか著／土曜社

【執筆者】山川均／村木源次郎／安成二郎／山崎今朝弥／和田久太郎／賀川豊彦／岩佐作太郎／堀保子／内田魯庵／松下芳男／土岐善麿／大近藤憲二／馬場孤蝶／宮島資夫／有島生馬／久米正雄／解説・大杉豊

◎9月

「もう一つの非命 橘宗一少年記」
西村修著／海曜社

【目次】墓碑の発見／一九七五年第一回墓前祭／あやめ　幼い日々の憂い／父・東の死／一〇歳のあやめ　兄・榮との対面／一九一六年、妹たちの明暗／宗一　帰国の日々／宗一からの手紙／震災後の狂乱／転がった「赤いリンゴ」／母　あやめの悲嘆／惣三郎の無念／軍人　甘粕の命乞い／一年後、狙撃事件の衝撃／サッコ、ヴァンゼッティ事件／和田久太郎の俳句／一九二九年、あやめの死／終章　破局からの出発、他

◎10月

「千本組始末記 アナキストやくざ笹井末三郎の映画渡世」（新版）
柏木隆法著／平凡社

【目次】「天久」爽春譜／千本組誕生／明治から大正へ／川崎・三菱両造船所大争議／末三郎出奔／大杉栄と「血桜団」／ギロチン社事件／大堰川の決闘／日活撮影所時代／宮島資夫出家の波紋／マキノトーキーの興亡／長二郎遭難／千本組分解／岡本潤追放／松本常保との再会／「琴姫七変化」前後／故郷へ／再版追記

◎11月

「現代に甦る大杉榮 自由の覚醒から生の拡充へ」
飛矢崎雅也著／東信堂

【目次】大杉の思想的原点－「自叙伝」世界（「自由」の原点／「社会」の原点／大杉の思想的原点）／「自由」と「社会」－大杉のアナーキズム（大杉と同時代／〈生の拡充〉－「反逆」の原理／〈征服の事実〉と〈相互扶助〉／自由連合論／「乱調」のアナーキズム）

「アナキズム 第17号 特集：大杉栄と現在－1923～2013」
アナキズム誌編集委員会

【目次】巻頭座談会「いま、大杉栄を語るということ」／田中ひかる・大杉栄の文章はなぜ読みつがれるのか？／水津哲・春三月縊り残され花に舞ふ／小林坩堝・詩篇・魔子／栗原康・蜂起の思想／高野慎三・映画『シュトルム・ウント・ドランクッ』制作意図／古屋淳二・映画『シュトルム・ウント・ドランクッ』をめぐって／廣川毅・古田大次郎を演じてみて、幾つか思うこと／白仁成昭・大杉栄の革命観／久保隆・大杉以後の場所

アナキズム文献センター発行
「大正アナキスト覚え帖」
廣畑研二著

【目次】労働運動社とギロチン社／甘粕事件と敵討ち／ギロチン社事件／年譜文献資料／アンソロジー　抵抗の記憶（橘あやめ、水沼辰夫他）【版型】A5、104頁【定価】1000円
【購入方法】郵便振替（A文献センター口座・本紙奥付記載）に部数、氏名住所をご記入の上、送料（一部80円）を合計した金額をご送金ください。

没後八十五年 和田久太郎のはえあるとき

後藤優子

Ⅲ　雪の風が告げる

もろもろの悩みも消ゆる雪の風

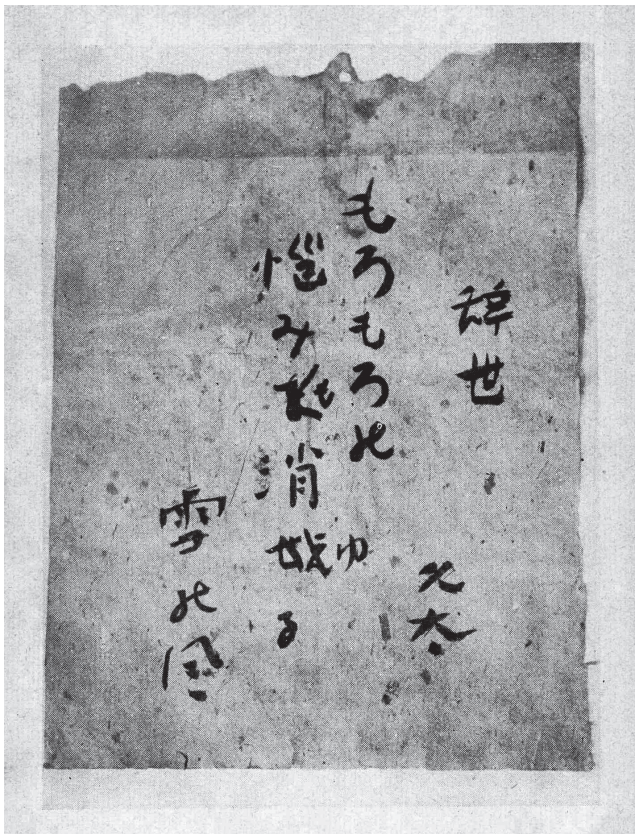
和田久太郎著『獄窓から』の巻頭にあるこの句を目にしたのは、今から一年ほど前のことだ。そこにふるびて端のほうはやぶけ幾重にも折りあとのある紙きれが写っていた。題詞に「辞世」とある。だが、その句は、一気に書かれたものではなかった。紙上には複数の書き直しの痕跡が残っていたのである。奇妙なことではあるが、その痕跡を認めると同時に、ひとつの思いが心にうかんだ。彼の生をたどりゆくうち、思いはやがて確信にかたむいていった。すなわち、終極、彼がわれわれに見せたかったのは「書き直す」という行為そのものだった、のではないかと。

『獄窓から』に収められたエッセー「句作のおもひ出」の冒頭には「考へて見ると、僕の半生には、俳句といふものがかなり深い關係を持つてゐる」とある。ふいにおとなの世界に投げこまれた少年にとって、作句は、見よう見まねであってもみずから世界を記述していく場であった。初めての句は大阪で正式に丁稚として働き始めた十三歳のときの作。紀元節の朝に大雪が降ったうれしさに仕事を放りだし近所の丁稚と雪遊びをしていて番頭に叱られ「大雪で國旗出すのも忘れけり」と十七文字をつらねた。技巧もなにもない一筆書きであるが、まずは自身の姿を客観的に描出してみせたのだった。その店の先輩に光躬という俳号を持つ人物がおり、和田は彼から手ほどきを受けると「錦江」（故郷明石の錦江城にちなむ）の号をもらう。このころ光躬に批評してもらったという句のうちで、興味深いものに「憂き郎を待つ身となりて鮓の桶」がある。なにかで読んだ〝憂き郎を待つ〟ということばが使ってみたくて〝鮓の桶〟の語をもちいた、とのことだが、当時を振りかえり「十三や四の小僧に『憂き郎を待つ』女の心なんかが解つて堪つたもんぢゃない」と苦笑している。だが、ここには、自己劇化の妙味がうかがえる。

作句の一方、和田は、現物屋で一人前の仕事をまかされるようになっていた。

――僕は十五の春から羽織を着せて貰つて自用俥で華客廻りをやらされ、そして、それが何よりの見得であり、得意でもあつた。御芽出度い小僧だつたのだね。

学業を中断したのは経済的な理由によるが、「早く偉いものになりたい」という願望もあった。しかし、俳句に求めたのは、べつな実存のありかだったのではないか。新聞に投句を始めた彼は、広告で見かけた「サエズリ」の同人・白花蛇



を訪ねる。そこで親身なアドバイスをもらったことが「俳壇へ首を突込んだ第一歩」となった。当時は各地方の俳誌がさかんであり、全国的な「五句集」「十句集」の類も多かった。彼は投句を続けながら「地方に於ける未知の俳友と親しみ得る嬉しさ」にかなり広い方面と関係をむすんでいたらしい。さらに運座にも参加し元老たちと相知るようになると「心中大いに得意がつて」いたという。しかし、小蛄庵小集において、その元老たちの句が「平凡陳腐」だと罵倒される事件が起こる。和田は「大いに驚いた」のだが、『続春夏秋冬』や『日本俳句』欄の句をみせられると、なるほどと共鳴せずにはいられなかった。彼はその二三日後、俳号を「酔蜂」とあらためる。ほどなく、伝統的な定型や季題を打破し「深い主観の内在力」がにじみ出ることを理想とする「新傾向俳句」が高唱されるようになった。当時の衝撃を和田はこう語る。

雁と云へば淋しい悲しい思ひを表はさねばならぬもの、清水といへばその清澄な涼しい趣きを詠まねばならぬものといふ様な固定観念にのみ支配されてゐる俳壇に飽き足らなかつた新人にとつては、これ等の句は確かに新方面を示してくれた處の一驚異だつたのだ。（略）新傾向派の風靡は、碧梧桐崇拝へと移つて行つた。碧梧桐は「碧師」と仰がれ、彼れが中村不折より六朝風を學んで書し始むるや、猫も杓子もそれを真似た。「龍眠帖」（不折の習字手本だ）と龍眠筆を所持し、折釘流の文字を書かねば俳人ぢやないといふ様な騒ぎだ。僕も又、この渦巻にまき込まれた。

みずからは「一句党」と卑下しながら、河東碧梧桐の『續日本俳句鈔』に自作が載せられたこともある。俳句を捨てるまぎわに俳友と吟行したときの作は「その荒壁の主じ鶏頭節くれて」。本人いわく「随分ぎこちない」が「句のよしあしは兎に角」その当時の句風が現れていると思う、と。ここまで熱中した俳句を和田が捨てることになるのは、前号で書いた重大な精神的危機がきっかけであった。

「久太句屑」の大正五年ごろの句には新傾向の作風を感じさせる作品がある。上述した句と異なるのは、すでに社会主義運動に没入して、道路人夫などをしていたときに「フト」つくった数少ない作であることだ。

浴衣褪せて日中を夢のよな男
金魚摑み殺したる性慾の悩み

一句めは、二十一歳の夏、自殺未遂に失敗して見知らぬ街を彷徨したころの自画像か。そうだとして、「ゆかたあせて」のなにか疲れた感じもしくは壮絶さを、「ひなかをゆめのよなおとこ」が、ふわっと疎句的に止揚している。和田らしい実存を思わせる句である。二句めは、字余りと大胆な句またがりに特徴がある。しかも語の選択、配置はこれ以外ありえないところまで絞りこまれている。定型を発条にしてみごとだ。どちらの句も季題趣味打破にとどまらない無二の鮮烈な輝きがある。

僕は俳句を捨ててから、丁度今年で十三年になる。この間差入になつた或る本の扉に、碧梧桐と井泉水との近作らしいのが四五句載せてあつたが、讀んで少しもいいとは思はなかつた。俳諧の潮流に遅くれてしまつたからかな？

獄中の彼のことばはわれわれを微笑ませる。同時にしんみりもさせる。和田が潮流に遅れたのではない。彼が気づかぬうちに潮流は終焉しつつあったのだ。だからその目は依然曇っていない。新傾向俳句が生み出したいわばぎこちなさの魅力は、やがて、斬新さを求める傾向から詰屈に流れる弊に堕していった。対照的に、「俳壇」から距離を置き、社会主義運動に活躍の場を見いだした和田の句は、詰屈さから解放され、自在なものになっている。

当時の俳壇も文壇もいっこう世界に開かれた場ではなかった。たとえば「碧師」は、断続的に約三年半の俳句行脚をこころみたが、それはパトロンに支えられた潤沢な「三昧」であった。大正期の文学界には、需要過剰の安定した市場が形成されるという特殊な事情が存在した。国外でおこなわれている戦争も、それを不可視のものとしてしりぞけた作家たちにとっては、つかのまの小春日和だった

かもしれない。自足的な条件のもと、彼らは、本能的に？自分たちだけの世界の境界をさだめ、社会から孤立した領域をつくろうとしたのではなかったか。そこでいかに〈逸脱〉をしようとも、限界が奈辺にあるか把握された自由は、やがて硬直化する傾向をはらんでいた。かかる状況で〈芸術〉は記号として消費されていく。非政治的な言語が審美的で芸術的な言語とされた。エリート主義・男性優位主義・個人主義の露呈である。そこに「われ」はいても「われわれ」は存在しない。文学的内向性は、個人を〈他者〉に遭遇させる機会を奪う。閉じられたその場には、ひとを孤独な個人的営為へと従属させようとする政治システムの価値観が正しく反映されているのだ。

かかる時代の潮流にさからうかのように、和田は、収監後ふたたび俳句に向かう。それは三年半ばかりの時間であったが、死と、同時に生とに見入ろうとする態度は、最後まで変わらなかった。「孤囚漫筆」で彼は語る。

囚人は、ある意味から『生ける屍』と云つていい。が斯うした生を味ふ深刻さから言へば、囚人は却つて『全的に生きる者』と言ひ得るだろう。

また監獄はけっして社会からへだてられた場ではなかった。エッセー「死刑を直視しつつ」で、彼は自分の行動を「空彈だつたなどといふお茶番めいた事に終わつてしまつたが、しかし死刑になれば、僕の行動は失敗を取り返して餘りある程の意義が加はるんだぞ。僕等の死刑が同志の上に齎す影響――、社會人心に及ぼす影響――それを今に思ひ當るがいい。よし、僕は喜んで死刑にならう――」と述べた。しかし、人心は、違っていたのだ。

『エライ變つた社會主義者やさうな――』

夕方、窓の外を歸つて行く一群の囚人の中から、斯うさゝやく聲が聞えた。

昨年十一月、或る風の吹く夕方にも、やはり同じ一群の人達が、『社會主義者が來るとお菜がよくなるつて言ふけど、一向に駄目ぢゃないか』などど言ひながら窓の下を通つた。が、その時には、たゞ苦笑をさせられたに過ぎなかつた。しかし今日の『エライ變つた社會主義者やさうな――』といふ言葉を聞いた時には、冷めたい、死人臭い、實に氣味の悪い手ですうーと顔を逆か撫でしられた如くに感じ、ブルブルと體の慄えるのを覺えると同時に、水濞のやうな味氣ない泪がポトポトと腹の底へ沁み込んだ（「孤囚漫筆」）。

連帯？己は夢を見ていたのだろうか――。そのとき彼はみずからの敗北を識るであろう。だが、気味の悪い震え、は来たるべき時代を正しく予見していたのだ。関東大震災はひとびとの潜在意識に蓄積していたものを暴きだした。それは社会的階級にかかわらず〈他者〉を容れない世界ではなかったか。大正期の「生命の跳躍」は、概念としての留保を欠き、最初から批判精神を受けつけないものであった。朦朧たる人心は、無思想の思想である「日本主義」と合一し、やがてみずからカタストロフへの道を進んでいく。歴史はくりかえす、のではなく、問題の解決は手つかずで残されたままに、3・11後の現在を逆照射している。

和田が、自死を決めてからそれまでと変わらない態度でことばを再記述し続けたことが、今信じられる。われわれは「現在教」にぬかずいてはならない。従前、〈原理〉が存在したのではない。世界はわれわれによって記述されるのだ。雪の風が告げる。それは〈偶然〉吹きすぎるのだ、と。

――特定秘密保護法案の可決された二〇一三年一二月に

〈完〉

アナキズム文献センター通信第25号
発行／2013年12月20日
発行所／アナキズム文献センター
編集／運営委員会
連絡先／東京都新宿区新宿1－30－12－302
郵便振替口座／00850－3－30010
口座名　A文献センター
Eメール／info@cira-japana.net
定価／一部100円